

朝鮮時代の女性詩人－李玉峯

On Yi Ok-bong “李玉峯” : A Female Poet of the Chosun Dynasty

山田 恭子

1. はじめに

李玉峯（生年不詳 -1592）¹は朝鮮女性詩人の中で、当代随一の詩評論家である洪萬宗（1643-1725）によって、「国朝第一」²と称されるほど優れた詩人であった。その名は、明詩の選集である錢謙益の『列朝詩集』（1652）³や、朱彝尊の『明詩綜』（1705）⁴にも伝わっている。また韓国の漢文教科書にもその詩〈自述〉⁵などが掲載され、知らない者がいないほど有名である。しかし、これまで日本においてはあまり紹介されなかった。⁶特に当時の朝鮮女性の中で、許蘭雪軒（1563-1589）の漢詩集『蘭雪軒集』⁷が、1603年に中国に伝わり、1632年には朝鮮に逆輸入され、第8次朝鮮通信使が来朝した1711年に、京都で和刻されたことと比べて対照的であるといえる。⁸本稿では李玉峯の漢詩作品数を特定すると共に、その人物像や特徴的な愛情詩に関して考察する。

これまでの研究では、朝鮮時代において、庶子であった李玉峯は妾になるしかない人生を送り、最後には夫とも別れて不幸であったとする見方が多い。しかし、彼女は王族の末裔であり、その人物像からは、自らの詩才を發揮できる人生を望み、才子を夫として選んでおり、ただ不幸な人生を送っただけではない。その詩は夫と共に暮らした生活と関連するものが多く、何よりも夫からその詩才を認められていた。また、その愛情詩は夫への情を詠ったものが大部分であり、その情の深さゆえに、人口に膾炙したのである。故に玉峯の愛情詩を見ることは彼女の心魂そのものを読解する作業であるといっても過言ではない。本稿では、玉峯の人物像とこれらの詩を考察することによって、同時代の朝鮮の女性とは異なる玉峯詩の特徴をより明らかにしたい。

2. 李玉峯の漢詩作品

李玉峯の漢詩は『嘉林世稿』附録⁹に32首、『李玉峯集』¹⁰に16首収録されている。『嘉林世稿』は、李玉峯の夫である雲江趙瑗（1544-1595）¹¹の玄孫趙正萬（1656-1739）が、亡き父がまとめた趙瑗以下、三代の詩文を上中下の三編にし、更に附録として李玉峯の詩を所収して1704年に刊行した木版本である。『李玉峯集』は許米子所蔵の筆写本で、その冒頭に、趙正萬の記した「李玉峯行蹟」が附されている。その他にも『東洋歴代女史詩

選』¹²、『逸士遺士』¹³、『晴窓軟談』¹⁴、『詩評補遺』¹⁵、『聞韶漫録』¹⁶、『国朝詩刪』¹⁷、『列朝詩集』、『明詩綜』にその詩が収録されている。

まず、『嘉林世稿』附録に収録されている玉峯詩の中で「斑竹怨」と「採蓮曲」は李達(1539-1612)¹⁸、「寶泉灘即事」は金宗直(1431-1492)¹⁹、「秋恨」「春日有懷」²⁰は許蘭雪軒(1563-1589)の漢詩である。全32首からこれらの5首を除くと、残りの『嘉林世稿』附録に収録されている作品は27首となる。

『李玉峰集』には16首収録されているが、そのうち13首は『嘉林世稿』附録の作品と重複しており、3首だけが異なる。

また『東洋歴代女史詩選』²¹には12首が収録されており、その中で3首は他の文集にはないものである。

残りの『逸士遺士』に9首中7首は重複、『晴窓軟談』に1首重複、『詩評補遺』に1首、『聞韶漫録』に1首が収録されており、その中で重複しないものを挙げると4首になる。

本稿では、内容が完全に重複一致している『列朝詩集』、『明詩綜』、『国朝詩刪』を除いた詩集を対象にして、玉峯詩の表を作成した。なお、同題目の詩は違いを示すために初句の一文字を括弧の中に入れて示した。また題目が異なる場合、鉤括弧内に記入した。

全作品数	原作品数	題目	『嘉林世稿』 附録 27 (32)	『李玉峰集』 13 (16)	『東洋歴代 女史詩選』 3 (12)	その他 掲載	他作との関連 (同一、類似を含む)
1		登楼	○	○			林億齡「登官楼」(『石川先生詩集』第3巻)と2文字違い
2		楼上	○	○ 「登楼」	○		3、4句目が鄭百鍊の詩として記録(許筠『鶴山樵談』)
3	1	萬興贈郎	○	○		「雲江公二首」 『大東詩選』 「即事」 『清脾録』	
4		自適	○	○			申光漢「自適」(『企齋別集』5巻)と5文字違い
5	2	秋思(翫)	○	○	○		
6		帰来亭	○	○	○		李堦「題帰来亭」(『松齋統集』1巻)と2文字違い

7		詠雪	○	○ 「詠雪次韻」			「此詩雲江公詩而誤録於此也」(『李玉峰集』)という記録有り
8		秋恨	○	○			許蘭雪軒「秋恨」(『許蘭雪軒集』)と1文字違い
9		斑竹怨	○	○	○		李達「斑竹怨」(『蓀谷集』)
10		採蓮曲(南)	○	○	○		李達「采菱曲」(『蓀谷集』)と10文字違い
11		寶泉灘即事	○	○			金宗直「寶泉灘即事」(『佔畢齋集』)と同一
12	3	玉峯家小池	○				
13	4	謝人來訪	○	○			
14	5	別恨	○				
15		初月	○				黃真伊「詠半月」と10文字違い
16	6	贈嫡子	○				
17	7	閨情(有)	○	○	○		
18	8	為人訴冤	○				
19	9	離怨	○				
20	10	賦雲江公除槐山	○				
21	11	雨	○				
22		詠梨花	○				李湜「吳慎孫所画詠物八首」(『四飴亭集』)6首目と9文字違い
23	12	呼韻贈妓	○				
24	13	閨情(平)	○				
25		七夕	○		○		申光漢「七夕詠女牛」(『企齋別集』)と3文字違い
26	14	寧越道中	○		○	「魯山墓」『芝峰類説』卷14	
27		自述	○			「贈雲江2首」『大東詩選』	尹鉉「題送清州人」(『菊圃集』下卷)3句目以外同一
28	15	贈兵使	○				
29	16	秋思(霜)	○				

30	17	癸未北乱	○			「夫因戒事在京」 『海東詩選』 「寄雲江」 『大東詩選』	
31		春日有懷	○		○		許蘭雪軒「春日有懷」(『許蘭雪軒集』)と一文字違い
32	18	謝徐牧使益小室 惠題額大字	○				
33	19	送人往驪江		○		「驪江」 『逸士遺士』	
34	20	金自菴綠次李逢 子雲韻		○			
35	21	寧越西軒次子雲 韻		○			
36		苦別離			○	「古別離」	鄭誦「怨別離」(『雪谷先生集』)の変形詩
37		詠燕			○		李承召「燕」(『三灘先生集』)と11文字違い
38	22	採蓮曲(蓮)			○		
39		竹西樓				『逸士遺士』 「即事」 『晴窓軟談』	宋人陳杰「初出大江移泊別浦」の3、4句と同一。
40	23	贈雲江以試官出京				『逸士遺士』	
41	24	春日即事				『詩評補遺』	
42	25	1589年に尹国馨に与えた漢詩				『聞韶漫録』	

- 他作とされる作品
- 他作と関連している作品

以上、全42作品中、完全な他作である5首を除くと37首、さらに李鍾文の論文²²で指摘された、他作との関連が深いと思われる作品12首を除くと、玉峯詩は総数25首となる。当時の朝鮮漢詩の作風は唐詩が流行しており、いわゆる擬古詩の最盛期であった。そのことを鑑みると、偶然似たような作詩となったことや、剽窃ともいえる他人の作品の引用、編纂の過程で他人の詩が混入したことも十分あり得る。そして玉峯詩の他作との関連を、剽窃なのか模倣なのか、あるいは誤って編集したものなのかを区分するのは、今後の研究によるところが大きいと考えられる。

3. 李玉峯の人物像

「璿源録卷之十三 太宗大王宗親録」²³によれば、李玉峯は名を媛とし、太宗大王の長男讓寧大君（1394-1462）の玄孫である李逢の三女として生まれた。李逢には妻の琅城孫氏がいたが、所生はすべて妾の子である。

讓寧大君 - 一男 順城君 - 妾一男 烏川副正 - 五男 鳳嶺守 - 三男 李逢

- 妾一男 好男（母 良女 毛老里）
- 妾二男 奇男（母 良女 毛老里）
- 妾一女 参奉 金有男（母良女 毛老里）
- 妾二女 縣令 高日厚妾
- 妾三女 承旨 趙瑗妾²⁴

二女と、三女の母親の名前がないことから、玉峯の母は婢女や妓生などの賤民であったと思われる。父の逢は1526年生、字は子雲である。鄭澈、李恒福、柳成龍らと親睦があり、文章家としても名を馳せた。1592年の壬辰倭乱（文祿の役）では義兵をまとめて活躍した。1595年には司憲府監察に抜擢、翌年には沃川郡守として貧しい農民を救済した。1597年の丁酉再乱（慶長の役）でも戦功をあげ、堂上官に至ったが、辞退し故郷に戻り余生を送った。享年78歳で嘉善大夫、戸曹参判を追贈された。²⁵彼は文武両道の人物であり、聡明な娘の玉峯を非常に可愛がった。そして娘のために文才のある婿を探すことになる。²⁶従って、「玉峯が庶女に生まれたために妾にならざるを得ず、妾になっても幸せにはなれず追い出された」²⁷とする主張は、妥当なものではないといえる。

まず李玉峯が夫である雲江趙瑗の妾になった経緯について、趙瑗の玄孫の趙正萬が記した「李玉峯行蹟」の内容をみると以下のようなになる。

玉峯は嫁に行く歳になっても自身の文才を自負して、将来の夫となる人に対しても文才の優れた人を求めた。そして父の李逢は娘のために様々な婿がねを探していたが、適当な者がいなかった。そうこうするうちに雲江公が、端雅でありながらも文章が優れていると、有名であることを知り、彼の元を訪れ、事実のままを告げた。しかし雲江公はその話を許さなかった。

そこで李逢はそのまま新庵李公の家を訪れ、その事情を再び述べた。新庵公は雲江公の舅の李尚書である。すると新庵公は笑いながらその願いを許し、雲江公に会っていった。

「どうして某の娘を引き受けないのか」

雲江公が答えた。

「年端も行かない官吏がなにを煩わしく妾まで置きましょうか」

新庵公が笑いながら言った。

「滑稽な、大の男の行いではない」

そうして、ついに日を定めて、玉峯を連れてくるようにしたが、その姿もまた文才のごとく優れていた。新庵公もまた不思議に感じた。²⁸

この経緯を見れば玉峯が妾にならざるを得なかったのではなく、自らがその道を選んだといえよう。庶女だった玉峯がすでに妻がいた雲江を選んだのは、彼女が自らの詩才に対する自負心を満足させるための一手段だったのである。彼女は妻であるか妾であるかという考えより、自らの詩才に値する人物を選ぼうとしたのであり、妾になったから不幸だという今日の価値概念とは異なることこそが、むしろ彼女の不幸の原因だったのかもしれない。そもそも当時の両班達が妾を持つことは当たり前の事であった。²⁹それは上の引用文にもあるように、雲江に対する新庵公の言葉からも推測できる。

また玉峯の詩が優れていたことは洪萬宗によって「国朝第一」と称されたのをはじめ、以下の多くの詩評³⁰をみれば明らかである。

我が姉と同時期に、李玉峯という者がいた。すなわち趙伯玉の妾である。その詩は非常に清らかで勇ましく、婦女の紅おしろいをつけた風ではない。³¹

極めて晩唐の情緒と品格がある。³²

二詩は清らかで丸く壮麗で、婦人の手によるものとは似ておらず、甚だ素晴らしい。³³

さらに次の引用文からは、玉峯の才能を誰よりも認めていたのは夫の雲江であり、時には他人にその詩を披露したことが分かる。

己丑年（1589）に私が新任として尚州に赴いた時、伯玉（雲江）は星州牧使として上京する途中だったので官舎で泊っていくことになった。私は、伯玉と一緒にその妾が留まっている所で、酒の席を設けたところ、伯玉がその妾に詩一首を作るよう勧め、私に贈ろうとした。李は即座に詠んで伯玉に書かせた。

「洛陽の才子をなぜ遅く召すのか、湘潭賦しょうたんふを作って屈原くつげんを弔うというが、手に逆鱗じゆんりゆうをとる危ないこの道、淮陽じゆんりゆうに高く臥すも亦君の恩」

詩を詠み考える間に、手で白暈扇を扇ぎ、時には唇を覆いながら、その声が清く凄絶であり、この世の人のように見えなかった。³⁴

しかしこの詩才によって玉峯は雲江の許から追われることになったのである。その経緯は以下の如くである。

平素よく知っていたある隣人の女が訪ねてきて、自分の夫が他人の牛を捕まえたことで尋問されているから、雲江公に伝えてその罪を免れるように訴状をしたためてほしい、と哀願した。李氏がその女を非常に可愛そうに思い、その頼みを拒みきれず、

「あえて公に書いてくれとは言えないが、あなたのために訴状を書いてあげましょう」といい、

その場で、絶句一首をしたためた。

<爲人訟冤>

洗面盆爲鏡 洗面器を鏡となし、

梳頭水作油 頭を水で梳り、油となす。

妾身非織女 妾の身は織女でないのに、

郎豈是牽牛³⁵ 郎君がどうして牽牛でありましょうか。

刑曹の堂上官たちがこの詩を見てたいそう驚き、その女に訊ねた。

「汝の訴状は誰に書いてもらったか」

その女が恐縮しながら答えた。

そうして、堂上官たちがその罪を哀れみ、そのまま釈放させた。そしてその詩を袖に入れて、雲江公の許に行き、

「公がこのような不思議な文才がおありなのに、われわれが今になって知るとは恨めしき事です」

公がその客を送り返した後、そのまま李氏を呼んでこさせ、言った。

「そなたが私のところに来てから何年かになるが、その間、何の咎とがもなかったのに、どうして、先ほど蘇白丁の妻のために詩を書いて、官吏たちが牢獄にいた罪人を釈放させ、人々の評判になるようなことをしたのか。このような大きな悪事を犯した以上、そなたを実家に送り返さねばなるまい」

李氏は涙を流しながら謝ったが、雲江公は最後まで李氏の言うことを聞かなかつ

た。何年か後に李氏が漢詩を詠んだ。

<自述>

近来安否問如何 最近我が君はどうしているのか。

月到紗窓妾恨多 窓辺に月の光が映れば妾は大層恨めしい。

若使夢魂行有跡 夢中に妾の魂を送ることが出来たなら、

門前石逕已成砂 君の門前の砂石になりたいことよ。

その語意が大層あわれで、人々を深く感動させた。しかし公は最後まで李氏が家中に戻ることを許さなかった。公の家法が非常に厳格だったのがこれで分かるであろう。³⁶

これをみると玉峯が追い出された理由は、単純に妾であったということより、その詩が人々の評判になったという点にある。公の家法がどのようなものであったか分からないが、許可もなく漢詩を作って世の評判になったことは、夫である雲江の立場からは到底許されるものではなかった。さらに女性の「能文博学」を蔑視する当時の社会³⁷においては、玉峯の行動は認められないことだった。それは同時代を生きた許蘭雪軒の例³⁸を見れば明らかである。ここでは「能文博学」は夫から怒りを買う一つの要素にもなったのである。

平素から雲江は玉峯の詩作を認めており、それは時に夫を凌駕するほどの才能であったのだろう。³⁹しかし、その詩才を夫の許可もなく、世に示したことは当然のごとく怒りを買ってしまったのである。次の評を見れば、雲江の心を推し量ることができる。

世に論ずる人々の中である者は「大君子の道が真実を包容するのに、害にならない」というがまさしくそうである。しかし我々の先祖の寛厚な心構えでも、このようなことが必ずしもあったわけではないから、玉峯の「才勝」を憎んでのことではないか。⁴⁰

また次の漢詩からは玉峯のある一面を探ることができる。

<贈嫡子>

妙誉皆童稚 奥妙を誉れとするは皆幼き頃より、

東方母子名 東方に母子の名を称える。

驚風君筆落 君が筆を落とせば風が驚き、

泣鬼我詩成 我が詩を成せば鬼神も哭す。

文才のために匹夫を嫌い、自ら夫を選んだ玉峯だが、果たして玉峯の詩才が優れたものであったとしても、このような自負心あふれる漢詩をもらった相手としてはどのような気持であったろうか。玉峯の文才を認めながらも複雑な感情を抱いたことであろう。特に3、4句目には、雲江の嫡子の非凡さと対比させ、自らの詩才を高らかに称賛する内容となっている。ここには雲江の妻の姿はない。おそらくその父の新庵公の言動からしても、穏和な賢夫人であったことだろう。また、これらの漢詩が雲江一家の中で披露されたということは、玉峯の詩才は家族公認のものであったといえよう。

この他にも、旅に出て遊覧する自らの身を王孫女とし、理不尽にも殺害されてしまった端宗への思いを綴った<寧越道中>の内容は、玉峯の詩才を余すことなく示すものである。

<寧越道中>

五日長干三日越 五日間川を渡り三日間山を越えた。
 哀詞吟断魯陵雲 魯陵⁴¹で雲の中では哀詞も断腸の思い。
 妾身亦是王孫女 妾の身もまた王孫女となり、
 此地鵲声不忍聞 ここで、不如婦の声を聞くに忍びず。

<寧越道中>は、1583年に三陟寧越府使に任命された夫に従って江原道を旅する玉峯が、魯陵の近くを通り、悲しくも王位を追われて殺害された魯山君すなわち端宗の悲劇と、王族の末裔である自らの気持を重ね合わせた作ったものである。故事としては『楚辞』「招隠士」の「王孫遊兮不帰、春草生兮萋萋」や、それをモチーフとした『玉台新詠』第十卷所収の謝朓「王孫遊」を土台としている。しかし、この詩を良く見れば、ただの故事による作詩ではないことは明らかである。玉峯の祖である、讓寧大君は太宗の長男であり、嫡子であったにも関わらず、王位に就くことはなかった。それは当時の様々な政治的理由もあったであろうが、玉峯は自らがその子孫であることを強く意識して作詩していることが明らかである。つまり王族の子孫であったことに対する玉峯の自負心と、すでに傍系となった現在の境遇への感慨が、王であったにも関わらず、叔父に殺害され、悲運やるかたない端宗への想いと重なり合っている。また「漢詩が非常に清らかでしっかりしており、到底女性のかざり詞ことばとは思えない」⁴²とする許筠の詩評から推して、一般の両班の妾とはまったく異なる資質の女性であったことが伺えよう。そのことを良く示す作品が、次の<贈兵士>であり、勇ましい軍師のイメージを髣髴させる内容となっている。

<贈兵士>

將軍號令急雷風 將軍の号令雷風のように急で、
萬馘懸街氣勢雄 敵の首を懸ける街の氣勢は雄雄しい。
鼓角声邊吹鐵笛 鼓笛の音が鳴り響き、
月涵滄海舞魚龍 月が浮かぶ青い海には魚龍が舞う。

この詩は男性の作かと思わせるほど強烈であり、もはや内容は閨房詩とはかけ離れている。玉峯は長らく雲江と生活を共にしながら二人の間に子供はいなかった。そのために玉峯の詩に母としての姿や兄弟を想う詩は一つもなく、このことによっても玉峯詩が他の朝鮮女性の漢詩とは違う点分かる。同世代に生きた許蘭雪軒は<哭子>で無くなった我が子への悲哀の情をのべ、<寄荷谷>で兄の身を心配する想いを表現している。しかし玉峯詩にはそのような実家の家族に対する作品はない。

つまり玉峯詩は、その全てといってもいいほど夫との生活との関わりの中だけに限られているといつてよい。これは玉峯詩を編纂した人物が趙瑗の玄孫であった点とも深く関わることであろう。蘭雪軒の場合、死後、その詩を整理したのは実家の弟である許筠であり、詩の応酬も実家との間に多く、そのため、実兄との関連が深い詩が入るのは当然であったと思える。反面、玉峯詩を編纂した人物が趙瑗の玄孫であれば、必然的に、その詩は趙瑗との生活でやり取りされたものが多くなったと考えられる。

4. 李玉峯の愛情詩

関丙秀の『韓国漢文学概論』⁴³によれば、愛情詩には作品内部の話者が作者と同一視出来るものと、そうではなく虚構的な想像を作品化したものがあるといわれるが、玉峯の愛情詩の場合は、ほぼ前者に当たるものばかりである。つまり、玉峯詩を「愛情詩」という観点で考慮する時、その内容はほぼ虚構ではない自身の実体験から描き出されているといっても過言ではない。

一方で、松浦友久の『中国詩歌原論』⁴⁴によれば、唐詩にあらわれた女性像は、「不特定女性に属する（1）宮怨詩の女性、（2）思婦詩⁴⁵の女性、（3）美女詩、嬌女詩の女性」と、「特定の女性に属する（4）歴史上伝説上の女性、（5）作者と直接に関係する女性」の5種類に分けられ、（1）～（4）までを「三人称的視点客体手法」、（5）を「一人称的視点主体的方法」と名付けている。そして、唐代の女性作者の詩に表れた女性像を見て気づくことは、男性作者の場合と同様、三人称的な客体化された描写によっており、それは、より多くの作品を残す女性詩人にいっそう著しい傾向だとされる。

このことは唐詩が流行した朝鮮中期にも同様である。同時代の『蘭雪軒集』をみても、

<夢作><遊仙詞><宮詞>など、虚構かつ三人称的視点客体手法が多く、愛情詩と思われるものも、夫に対する自らの赤裸々な心情を綴ったものはない。唯一、閨房の女心を著したといえる詩は『列朝詩集』や『嘉林世稿』附録に誤収されていた<秋恨>である。

<秋恨>

絳紗遥隔夜燈紅 紅い紗は、遥か夜を隔つ部屋の灯火の紅、
 夢覚羅衾一半空 夢から覚めて、薄布団の片方が空いている。
 霜冷玉籠鸚鵡語 霜が冷たく、美しい籠にはオウムが鳴き、
 満階梧葉落西風 石段にはあおぎりの葉が秋風で落ちる。

<秋恨>は、秋の夜長を独り女が空しくたたずむ様子を描いており、『蘭雪軒集』の中では、むしろ非常に例外的な趣向を持った内容だといえる。ゆえにこの詩が玉峯の作として『嘉林世稿』附録に誤収されたのにも、それなりの理由があると考えられる。すなわち許蘭雪軒の愛情詩は、三人称的視点客体手法によるものが多いのに、<秋恨>は「一人称的視点主体的方法」で描かれており、そのために後代の人によって、その詩風から玉峯詩として誤収された可能性もある。

実際、玉峯の愛情詩は夫との生活と密着な関係を持ち、そのほとんどが、作者自身の姿を描いている。

その例としては、まず<漫興贈郎>が挙げられる。

<漫興贈郎>

柳外江頭五馬嘶 柳のそばの江上に五頭の馬がいなく。
 半醒愁醉下楼時 半ば醒めたよう、色を変え、酔ったように、樓台に下りる。
 春紅欲度臨粧鏡 ぱっと咲いた春の紅花、ほっそりとした顔で化粧鏡台に臨む。
 試畫梅窓却月眉 梅花の咲く窓辺に座り、半月のような眉をかく。

<漫興贈郎>は、1583年の<癸未北乱>⁴⁷と共に作られた詩で、咸鏡道国境付近で夷敵と戦う夫を励ますと共に、ようやく夫に逢える女心を描いたものである。本来(2)の思婦詩である征夫思婦を描いても妥当な内容であるにも関わらず、(5)の作者と直接に関係する女性、すなわち作者の姿そのものとして描かれている。つまり、愛情詩を詠んだ作品内部の話者がイコール作者として実際の経験を作品化しており、虚構的な想像を作品化したものではない。ここで玉峯は他の女人に仮託された出征した夫への憂愁ではなく、帰還する夫と再会できる自身の感慨を詠んでいるといえよう。

次の〈閨情〉もやはり同じ傾向がみられる。その内容は君の到来を待ち望む歌であるが、作中の女人の姿は他ならぬ作者自身である。

〈閨情〉

有約郎何晩 約束をしたのに君はどうしてこんなに遅いのか。
庭梅欲謝時 庭の梅の花が落ちようとする時、
忽聞枝上鵲 突然枝の上で鵲の声を聞く。
虚畫鏡中眉 むなしく鏡を覗き眉をかく。

これら〈漫興贈郎〉と〈閨情〉の共通点は季節が春であり、また君を想って詠んだ内容であるということである。また自身の感情を直接表さずに、視覚的に表現した点も同じである。このような君を想って詠んだ内容は、(1) 宮怨詩の女性や(2) 思婦詩の女性として、三人称的な手法でもよく見られるが、玉峯は、恋しい君を待つ自らを表現しており、それは鏡に向かって眉を描く女の姿として映し出されているのである。

次は君との離別に対する悲しみを表現した詩を見てみよう。まず君と共に暮していた時に詠んだものと思われるものを挙げる。

〈別恨〉

明宵雖短短 君が去った明日の宵は短くとも、
今夜願長長 君がいらっしゃる今宵は長きことを願う。
鶏声聽欲曉 鶏の声が聞こえて夜が明ければ、
雙臉涙千行 頬には涙が限りなく流れる。

〈別恨〉での「短短」「長長」という反復は、君と長らく共にいたいという女心を更に重ね、朝になれば帰ってしまう君に対する恨めしい気持ちを表したものである。前章で挙げた尹国馨の玉峯への詩評の記録を見れば、玉峯は1589年までは、雲江と一緒にいたことが明らかであり、その後1592年には朝鮮の役で亡くなっているため、1589年以前に詠まれたものであろう。

一方で雲江の怒りを買って、離別した後に詠んだ詩は、上で引用した〈自述〉を含めて次のものがある。

<離怨>

深情容易寄 深い情を容易に表せようか。
 欲説更含羞 説こうとしても、更に恥じ入るばかり。
 若問香閨信 もし君が、離れて暮す妾のことを訊ねたら、
 残粧独倚楼 残された昔のままで、一人楼閣に座っていると伝えておくれ。

<閨情>

平生離恨成身病 平生の離別の恨みが身の病となり、
 酒不能療藥不治 酒でも良くならず、薬でも治らない。
 衾裏涙如水下水 布団の中で流す涙は氷から落ちる水の如く、
 日夜長流人不知 夜昼となく久しく流れることを人は知らず。

これらは全て離別を主題としており、現実的で切実な気持ちをぶつけるような感じを与えている。そして先の同題目である<閨情>の二つを比較すると、前者は自分の姿を春の夜の場面に凝縮させているのに比べ、後者は自分の気持ちをそのまま訴えかける形式となっている。離別していた時期は、朝鮮の役で亡くなる前のわずかの間であり、玉峯の心は雲江を想うばかりの日々であったことが想像できる。

以上の玉峯詩の共通点は、夫との実生活を元に、あふれんばかりの情が表現されていることである。夫との再会を心待ちにする女、愛する夫との離別を恨めしく想う女、これらは全て作品内部の話者が作者と同一視されるものであり、それこそが玉峯の愛情詩の特徴だといえよう。

5. おわりに

本稿では李玉峯の漢詩作品について考察した。そして「李玉峯行蹟」⁴⁸から玉峯が妾となった理由が、妾になるしかなかったのではなく、自らが自身の詩才に見合うだけの夫を選んだ結果であったということを述べた。<贈嫡子>や<寧越道中>などの作品からは玉峯の詩才に対する自負心が良く表れているといえよう。さらには<贈兵士>のような、男性の作かと思わせるほどの作風も見られ、他の閨房詩とは違い、母としての情や家族愛を表わした漢詩はみられない。また玉峯の愛情詩は、夫との生活を中心に己の心を描いたものであり、すべて「一人称的視点主体的手法」によっている。特に<漫興贈郎><閨情>では君を待つ切ない心が、鏡の中の眉を画く女の姿として描かれている。また<離怨>と<閨情>は玉峯の離別に対する悲しみを良く表わしたものと見える。すなわち、玉峯詩の場合、君に対する恋しさが離別と直結しているともいえよう。そしてその切々とした愛情

詩ゆえに今なお多くの人々に詠み継がれ、朝鮮女性詩人としての生命を保ち続けていると考えられる。

注

- 1 李玉峯の生没年代は未詳である。李玉峯の夫の雲江趙瑗（1544-1595）の玄孫が記録した「李玉峯行蹟」によれば、「翰林承旨趙某之妾、遭壬辰倭乱死之」と記録されていることや、当時の妾は概ね夫より相当年下であることが多いことから、少なくとも趙瑗よりは後代の生まれであり、没年は壬辰倭乱（文禄の役）の1592年と推定される。なお、「李玉峯行蹟」は許米子氏の所蔵本である『李玉峰集』に収録されており、原典には李玉峯の名はすべて「峯」の字で記録されている。本稿での名称はすべて「李玉峯」に統一した。許米子所蔵本『李玉峰集』（許米子編『朝鮮女流詩文全集』1、大学社、1988、439～444頁）参照。
- 2 洪萬宗『小華詩評』には「瑗之妾玉峯李氏、稱為国朝第一」（洪萬宗『洪萬宗全集』下、大学社、1980、868頁）とある。
- 3 錢謙益『列朝詩集』聞集第六に『嘉林世稿』附録の最初の11作品に該当する「斑竹怨」「採蓮曲」「婦来亭」「登楼」「萬興贈郎」「登楼（楼上）」「自適」「秋思」「秋恨」「寶泉灘即事」「詠雪次韻（詠雪）」を所収。
- 4 朱彝燮『明詩綜』卷九十五には〈採蓮曲〉〈自適〉を所収。なお『明詩綜』には〈採蓮曲〉が「採蓮曲」と表記されている。
- 5 〈自述〉は「夢魂」という題目で広く知られている。なお、この詩は玉峯のオリジナルの詩とはいい難く、3句目以外は、尹鉉（1514-1578）の「題送清州人」と同じである。尹鉉は1572年に明国にも派遣されており、生没年代からしていえば尹鉉の詩を元に李玉峯が詩作した可能性が高い。
- 6 李玉峯に関する論文としては次のものがある。崔世貞「蘭雪軒・玉峯・梅窓 漢詩比較研究」（慶北大教育大学院碩士論文、1984）任起演「李玉峰研究」（成均館大学校教育大学院碩士論文、1991）李鐘文「李玉峯의 작품으로 알려진 漢詩의 作者에 對한 再檢討」（『韓國漢文學研究』47、2011）また日本で玉峯詩について紹介したものには瀬尾文子『春怨秋思コリア漢詩鑑賞』（角川書店、2003、162頁）がある。
- 7 『蘭雪軒集』は末弟の許筠が亡き姉の蘭雪軒のために編纂し、1606年に明臣の朱之蕃を介して中国に伝わった。1632年には東萊府にて重刊され、この重刊本が1711年に

- 京都文台屋治郎兵衛と儀兵衛によって開版された。現在は国立公文書館に『蘭雪軒詩集』として所蔵されている。
- 8 拙稿「허난설헌(許蘭雪軒) 한시와 일본 에도시대 여성 한시 작가」(『淵民学志』第13号、淵民学会、2010)
 - 9 趙正萬『嘉林世稿』(韓国中央研究院マイクロフィルム資料)
 - 10 許米子所蔵本、前掲書、437～451頁。
 - 11 趙瑗の字は伯玉、雲江は雅号である。黃海都事、趙應恭の次男として1544年に生まれ、後に父方の叔父の應寬の養子になった。実父、養父共に早世したが、聡明で、養母郭氏と生母閔氏に孝を尽くした。7歳の時に徐公からもらった桃に「蟠桃秋正熟、何以献吾親、願作西王母、乘鸞飛去身」と漢詩をつけた逸話が伝わっており、幼い時から神童の誉れが高かった。後に新庵李俊民(1524-1590)の婿となる。林川趙氏宗親会『林川趙氏先賢事蹟記』第一輯(宝晋齋、1977、83頁)
 - 12 郭璨『東洋歴代女史詩選』(宝文館、1920)
 - 13 張志淵『逸士遺士』(太学社、1982、233～234頁)
 - 14 申欽『晴窓軟談』(韓国中央研究院所蔵)
 - 15 洪萬宗『詩評補遺』下編(洪萬宗、前掲書、314～315頁)
 - 16 尹国馨『聞韶漫録』(韓国中央研究院所蔵)
 - 17 許筠『国朝詩刪』(韓国国立ソウル大学所蔵)
 - 18 李達の『蓀谷集』に収録されているが、<採蓮曲>は題目が「采菱曲」となっている。
 - 19 金宗直の『佔畢齋集』に収録されている。
 - 20 『許蘭雪軒集』に収録。
 - 21 郭璨、前掲書。
 - 22 詳細については李鐘文、前掲論文を参考にされたい。
 - 23 「璿源録卷之十三 太宗大王宗親録」(『朝鮮王朝璿源録』3、民昌文化社、1992)
 - 24 上掲書、1961頁。
 - 25 『国朝人物考』「李逢」にある李俊男「詩稿跋」を参照。
 - 26 生而聡慧特異、其父奇愛之、教以文字、妙解絶人、嗜好成癖。其父歳買書籍以資、繙閱藻思日進。最工於詩、得於天機、而不事踏襲、意致閑雅、調響清婉、藹然有開元天寶正始之音、実為閩秀中第一。自負其才、不肯輕易許人、欲求才華文望之高出一世者、而從之。(「李玉峯行蹟」、許米子所蔵本、前掲書、439～444頁)
 - 27 任起演、前掲論文、38頁。
 - 28 自負其才、不肯輕易許人、欲求才華文望之高出一世者、而從之。其父體其意、求之不

得、聞公雅有盛名、懷刺請謁、以実告之。公不許。遂轉往新菴李公宅、更申其情。新菴、即公之外舅李尚書也。笑而許之。仍謂雲江公曰、「君何不從其人之意乎？」公對、「以年少名官、何煩媵御之卜也。」新菴曰、「笑非丈夫事也。」遂令卜日率來。貌如其才、新菴亦奇之。（『李玉峯行蹟』、許米子所藏本、前掲書、439～444頁）原典の句読点や日本語訳に関しては、詩文も含めてすべて筆者による。またその際、注6の論文や、以下の韓国語訳を参考にした。江原大学校江原文化研究所編『江原女性詩文集』（江原大学校江原文化研究所、1998、427～450頁）

- 29 雲江は岳父であるに新庵公の外叔父南冥の門下生として学んだが、南冥もやはり妓女を妾としていた。南冥の逸話については、民族文化推進会編『大東野乘』14（民族文化推進会、1971、11頁）、『栗谷全書』卷二十九「經筵日記 二」（李珥『栗谷全書』成均館大学校大東文化研究、1958、3頁）を参照。成渾の『牛溪集』にある「與安習之」の辛未9月條によると、同時代の儒学者徐敬徳もやはり妾がいたとある。（李能和『朝鮮女俗考』翰南書林、1927、86頁）
- 30 李玉峯の詩評については李鍾殷・鄭珉 編『韓国歴代詩話類編』（亞細亞文化社、1988、339～341頁）参照。
- 31 家姉蘭雪一時、有李玉峯者、則趙伯玉之妾也。詩亦清壯、無脂粉態。（許筠『惺叟詩話』上掲書、340頁）
- 32 極有晚唐調格（洪萬宗『詩評補遺』下編）上掲書、341頁。
- 33 二詩清圓壯麗、似非出於婦人之手、甚可嘉也。（權應仁『松溪漫録』）上掲書、48頁。二詩とは、＜漫興贈郎＞＜癸未北乱＞をさす。
- 34 己丑余新赴尚州、伯玉遞星牧上京、歷宿於州館、余與伯玉、說酌於其妾所寓處、伯玉勸作一句詩以贈我、李即席口占倩筆伯玉曰、洛陽何遲召、作賦湘潭弔屈原、手扮逆鱗危此道、淮陽高臥亦君恩、吟咏構思之際、手麾白疊扇、時或掩唇、其声清婉悽絶、似非人世間人。（尹国馨『聞韶漫録』）民族文化推進会編、前掲書、11頁。
- 35 「妾身非織女、郎豈是牽牛」は李白の句を引用しており、李德懋の剽窃という批判もあるが、ここでは故事を利用した機知を評価したい。李德懋「清脾録」（金鍾奭編『禪家龜鑑諺解』尚文閣、1969、78頁）、李德懋「天涯知己書」（『青莊館全書』下巻、卷之六十三、ソウル大学校古典刊行会、1966）参照。
- 36 嘗有隣女之素相識者、來告、其夫為屠者之援引、乞雲江公一書于該曹、要免其罪。李氏深加矜憐、而不敢闕于公、乃曰「我雖不敢請書、當為爾書給狀辭矣。」雖書一絶曰「洗面盆為鏡、梳頭水作油、妾身非織女、郎豈是牽牛」該曹諸堂見而大驚、詰問之曰「爾之狀辭、誰所書乎？」其女惶急直對以狀、諸堂冤其罪而釈之。袖其詩、而訪公言曰「公有如許人之奇才、而恨吾輩聞知之晚也。」公送客之後、遂招李氏而出曰「汝

- 我從屢年、曾無所失、今何為可屠者妻作詩以贈、至積王獄罪囚煩人耳目乎？此其大不可、即還汝家也！」李氏涕泣謝之、公終不聽。李氏遂不得更侍于公、歸家屢年、有詩曰「今來安否問如何、月到紗窓妾恨多、若使夢魂行有跡、門前石逕已成砂」語意悲絕感人者深、而公竟不許其還來、可見其家法之嚴甚也。（「李玉峯行蹟」、許米子所藏本、前掲書、440～441頁）
- 37 李丙燾「閨房文学」（『学之光』12号、学之光社、1917）、金榮洙「女流文学研究의 몇 가지 檢討」（『国文学論集』12輯、檀国大学校国語国文科、1985、97頁）参照。
- 38 許蘭雪軒は夫の家族もとでその詩才を發揮できず、死後実弟によって世に知らされた。
- 39 以下の「李玉峯行蹟」から、雲江は自分の代わりとして玉峯に詩作させていたことが分かる。平素公罷官閑居、有人乞曰、書而未有儲、公使之作答、答曰、何不借梳于男山之曾耶。雖此一句語、可見其才之呈露也。（「李玉峯行蹟」、許米子所藏本、前掲書、440～441頁）
- 40 世之論者或言、大君子包容之道、不害為容真是亦然也。仰惟吾先祖之寬厚不必有是、而無乃惡其才勝而然耶？（「李玉峯行蹟」、上掲書、443頁）
- 41 端宗の墓。
- 42 詩甚清健、殆非婦人脂粉語也。（許筠『鶴山樵談』）
- 43 愛情詩、すなわち愛情を素材とした作品は二分類され、作品内部の話者が作家と同一視されるばあいと、そうでない場合に分かれるとしている。関丙秀『韓国漢文学概論』（太学社、1996、284頁）
- 44 松浦友久『中国詩歌原論』（東京：大修館書店、1986）
- 45 思婦詩とは「征夫思婦」の詩であり、「故郷の空閨にある妻が、出征した夫を思う、という情況を歌うもの」とされる。松浦友久、前掲書、54頁参照。
- 46 日本語訳はすべて筆者による。原典や翻訳に関しては、以下を参照した。張正龍『許雪軒評伝』（새문사、2007、318頁）、仲井健治著・許米子訳『일본인이 본 허난설헌 한시의 세계』（国学資料院、2003、169頁）参照。
- 47 癸未北乱とは癸未年（1583）1月に咸鏡道にいた夷敵が乱をなし、2月には申砦が賊を撃破、7月には首魁の首を切り処刑したとされる。同年の春に玉峯は〈癸未北乱〉と題する詩を著した。
- 48 「李玉峯行蹟」（許米子所藏本、前掲書、440～441頁）

参考文献

資料

- 趙正萬 編『嘉林世稿』（韓国中央研究院マイクロフィルム資料）
申欽『晴窓軟談』（韓国中央研究所蔵）
尹国馨『聞韶漫録』（韓国中央研究所蔵）
張志淵 編『大東詩選』（韓国国立ソウル大学校所蔵）
許筠 編『国朝詩刪』（韓国国立ソウル大学校所蔵）
許筠 編『蘭雪軒詩集』（東京：国立公文書館所蔵）

単行本

- 江原大学校江原文化研究所編『江原女性詩文集』（江原大学校江原文化研究所、1998）
郭璨『東洋歴代女史詩選』（宝文館、1920）
金鍾奭編『禅家龜鑑諺解』（尚文閣、1969）
李珥『栗谷全書』（成均館大学校大東文化研究、1958）
関丙秀『韓国漢文学概論』（太学社、1996）
民族文化推進会編『大東野乘』14（民族文化推進会、1971）
民族文化推進会編『栗谷全書』（韓国文集叢刊 45、民族文化推進会、1989）
世宗大王記念事業会 訳編『国訳 国朝人物考』（世宗大王記念事業会、1999）
李圭瑢 編『海東詩選』（民族文化社、1981）
李能和『朝鮮女俗考』（翰南書林、1927）
李徳懋『青莊館全書』下巻（ソウル大学校古典刊行会、1966）
李鍾殷・鄭珉 編『韓国歴代詩話類編』（亜細亜文化社、1988）
林川趙氏宗親会『林川趙氏先賢事蹟記』第一輯（宝晋齋、1977）
張正龍『許雪軒評伝』（새문사、2007）
張志淵『逸士遺士』（太学社、1982）
許米子編『朝鮮女流詩文全集』1（太学社、1988）
洪萬宗『洪萬宗全集』上下（太学社、1980）
楊家駱 編『列朝詩集小伝』（台北：世界書局、1985）
朱彝尊『明詩綜』歴代詩文総集（台北：世界書局、1989）
松浦友久『中国詩歌原論』（東京：大修館書店、1986）

論文

金栄洙「女流文学研究의 몇가지 檢討」(『国文学論集』12輯、檀国大学校国語国文科、1985)

李鐘文「李玉峯의 작품으로 알려진 漢詩의 作者에 對한 再檢討」(『韓國漢文學研究』47、韓國漢文學硏究會、2011)

李丙燾「閨房文學」(『學之光』12號、學之光社、1917)

任起演「李玉峰研究」(成均館大學校教育大學院碩士論文、1991)

拙稿「허난설헌(許蘭雪軒) 한시와 일본 에도시대 여성 한시 작가」(『淵民學志』第13號、淵民學會、2010)

崔世貞「蘭雪軒·玉峯·梅窓 漢詩比較研究」(慶北大教育大學院碩士論文、1984)

翻譯書

南晚星 訳『芝峰類說』(乙酉文化社、1994)

安大会 訳註『小華詩評』(國學資料院、1995)

仲井健治著·許米子訳『일본인이 본 허난설헌 한시의 세계』(國學資料院、2003)